

〔デザインノート〕

パブリックスペースに関するフィールドワーク報告

— 渋谷駅及び周辺地域におけるサイト・リノベーション —

杉浦久子・鈴木さやか・吉田織音・後藤友香・長久保麗子

1. はじめに

研究室では、建築の立場から人と環境、場所の関係をテーマに設計活動、フィールドワークを行ってきた。本稿では2010年度に杉浦研究室を中心に行ったサイト・リノベーションの活動について報告する。具体的には、第3回アーバン・エキスポ「shibuya 1000」展にて行った「ブックつり〜」プロジェクト、「秋桜祭」にて行った「シャラ・ぼわん」プロジェクト、「六本木アートナイト 2011」にて企画立案した「はなみち」プロジェクト（東日本大震災の影響のため中断）、以上3つの活動について（主には実現した2つの活動について）を「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—渋谷駅及び周辺地域におけるサイト・リノベーション—^{※注1}」としてまとめ、報告するものである。

この3つのプロジェクトの関係は、まず「ブックつり〜」プロジェクトの企画立案を行う中から、その実験的プロジェクトとして「シャラ・ぼわん」プロジェクトを行った。さらに、突然の依頼を受け、「六本木アートナイト 2011」にて「シャラ・ぼわん」プロジェクトを発展させる形で「はなみち」プロジェクトを企画立案することとなった。

研究室では「shibuya 1000」展には2010年度、第2回より参加し、渋谷でのサイト・リノベーションは今回で2回目となる。今回は渋谷の道路上の公共空間、消え行く跨線橋でのプロジェクトとなり、10年程度継続してきたサイト・リノベーション活動の中でも大変ハードルの高いものであった。複数の関係者の絡むコードだらけの空間にサイト・リノベーション活動を行うことの可能性のチャレンジとなった。（以上の3つのプロジェクトは昭和女子大学環境デザイン学科「デザイン力GP」の活動の一環でもある。）

2. サイト・リノベーションの定義と経緯

スクラップ・アンド・ビルドの時代から、既にあるストックを見直していく時代へと変移しつつある現在、当たり前のものでありながらそこに存在している建築のみならず様々な既存空間の質を再発見し、顕在化させ、新たな場をつくりだすことも、建築的命題と考えている。また、広い意味での既存のパブリックスペースや、場所の問題を考えること

は、まちづくりとしての意味を持つかと思う。

社会のインフラの大半が整えられた今日では、単に建てることだけが建築的営為ではないのではないか。「サイト・リノベーション」の定義は、「場所に建築を建てるという行為のみならず、積極的な意味において建てないことも含め、既存空間の意味やポテンシャルを再発見し、人を含む空間全体を関係づけていくような環境をつくること」である。今日こうした方法論が必要になってきていると考える。また、その手法として環境のサイト・リーディングを行い、既存空間の中にポテンシャルのある場所を見つけ、インスタレーションというアートの手法を用いて、まさに（仮設）空間を設置し「場」に「出来事」や「状況」を起こす。こうしたことで場所に対して、大きな開発ではなく非日常の環境をつくるのが可能になると考えている。

2010年度、第2回「shibuya 1000」展で行った渋谷でのサイト・リノベーションは、都市の地下空間をリサーチし、地下空間にある日常的な音に注目し、不可視の都市現象を顕在化したが、ここから何かアクティビティが起こるようなものではなかった。今回は特に渋谷の都市現象を可視化し、「場」に「出来事」や「状況」を起こすことを目指した。

■アーバン・エキスポ「shibuya 1000」

渋谷駅とその周辺をフィールドにした「まちづくりイベント」である。ダイナミックに変貌していく渋谷駅を舞台に、写真家、映像作家、デザイナー、建築家など、多くの若手クリエイターがそれぞれの視点から渋谷の魅力を伝える。

2009年度グッドデザイン賞を受賞。今回で3回目の開催となり、研究室では、2010年の第2回から参加し、今回で2回目となる。渋谷は、これから20年にもわたる工事を経て、その姿を大きく変える。刻々と姿を変える都市空間を活用して、新しい都市の形を展示するものである。

■六本木アートナイト

様々な商業施設や文化施設が集積する六本木のまちに、アート作品のみならず、デザイン、音楽、映像、パフォーマンスなどを含む多様な作品を点在させて、アートとまちが一体化することによって、六本木の文化的なイメージを



写真1 ミーティング



写真2 敷地調査

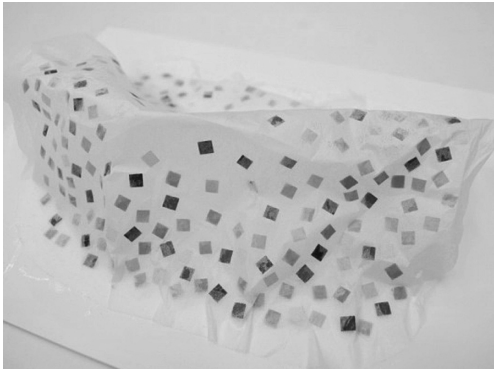


写真3 エスキス1案模型



写真4 竹の加工作業

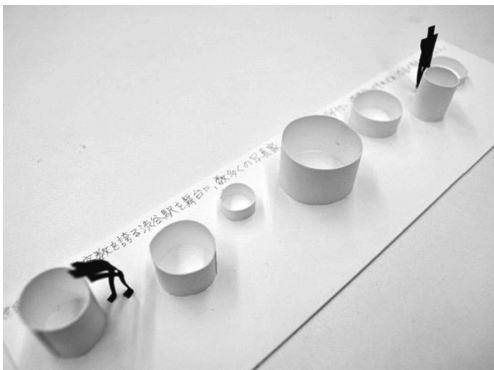


写真5 エスキス2案模型



写真6 竹のしなり方実験



写真7 空間イメージ模型

■竹
幅 40×厚約 15 mm
(先端部：40×約 8 mm)
手すり有効 20 mm
やすりがけの後、難燃スプレーを塗布し、
その上から白い水性絵具を塗装する。

■接合部
金属製の不燃性結束バンドで固定。

■手すり
跨線橋、既存の手すり。

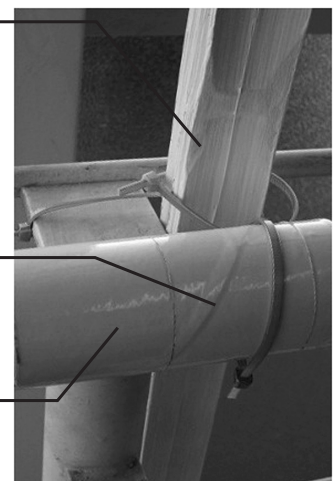


写真8 手すり詳細部分

向上させ、大都市におけるまちづくりの先駆的なモデルを創出。東京を代表するアートの祭典として、日本のみならず世界を目指すものである。

東京都、(財)東京都歴史文化財団、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合】の共同主催。第1回目の開催は2009年3月。すでに2回行われ、今回で3回目であった。3回目は、これまでと同様に広域性、回遊性、話題性を追求していくとともに、より一層参加性のあるプログラムを充実させ、東京を代表するフェスティバルとして更なる進化、発展を遂げるべく、様々なアーティストや企画が候補に挙がっていたが、東日本大震災の影響により已むなく開催は中止となった。

3. 「ブックつり〜」プロジェクト

3-1. 「ブックつり〜」プロジェクトの目的

「サイト・リノベーション」(「場」に「出来事」を起こす)という活動の一環として、2011年「ブックつり〜」プロジェクトを渋谷駅から宮益坂方面に延びる「跨線橋」(明治通り上の「自由通路」)で行った。(写真2)2010年に引き続き、2度目の参加となった2011年「shibuya 1000」展の中で行ったものである。

跨線橋を通行する人々の多くは通勤、通学などで、その通路を利用するが、そこで人々のコミュニティが生まれることはほとんどない。この場所は、日常的に多くの乗降客が移動を繰り返しているながらも、人々の繋がり希薄で、渋谷というまちの一断面を象徴するような場所であった。そのため、人と人が繋がることを目的として、今回の「サイト・リノベーション」を行うことを考えた。

3-2. 「ブックつり〜」プロジェクトの概要

「ブックつり〜」プロジェクトでは本という媒体によって人と人とを繋げるきっかけとなるようなコミュニケーションの空間をつくった。(写真9)古本を通路上部から吊し、本の立体カタログのような空間を設営した。通行人は通行しながら欲しい本を選び、持参した本にメッセージを添えて交換するという空間を計画した。(写真10, 12)渋谷から集められ循環していく様々なジャンルの本の集積は現在の渋谷の多様性を表している。(2月)

3-3. 「ブックつり〜」プロジェクトのコンセプト

■場所性から動きを伴う空間へ

開催地が跨線橋に決定した後、跨線橋を中心として「サイト・リーディング」を行った。その結果として、この全

長約100メートルの歩行空間は、多様な駅利用者によって使用されているが、とりわけ宮益坂周辺にある企業や学校へ向かう多くの通勤、通学者が日常的に利用していることを見出した。

渋谷を移動する「人」が生むエネルギーを表したいとの想いが生まれ、生物的な「動きを伴う空間」というイメージが生まれた。この場所を利用する人々も空間の可能性と考え、通行する人々の所有物を集積、循環させることで渋谷の空間性が現れるのではないかと考えた。

■都市にコミュニケーションを起こす

「ブックつり〜」プロジェクトでは、だれもが所有している「本」を媒体とした。渋谷で集められた本は、それらの所有者の趣味や特徴を象徴しこの場所を表現する。

本を使用した物々交換のルールとして、参加者は自らの本にメッセージカードを添付することを設定することにより、本とカードが人と人を繋ぐ端緒となることを試みた。コミュニティが希薄な渋谷で人々の関係が広がる手段になると考えた。

■コードが形になる

プロジェクトをこの場所に設置する問題点としては、渋谷という場所は通行量が多いため、利用者の安全に配慮した非常に多くの規制が存在していたこともあり、素材の竹が安全上の障害にならないように試行錯誤した。(写真8)結果、通路空間の両脇壁面や天井にギリギリ沿った、極めて微かな空間にブックツリーが立ち現れることになった。それは、凶らずもこの場所に通常あるが、目には見えない規制=コードを表現したものとなった。(直前に安全上の理由からさらにアーチの本数が減ったことは残念ではあったが)

跨線橋という筒状の長い歩行空間に、空中から吊された本は、ちょうど電車の吊り広告のように通行者の目に容易に留まり、日常生活の延長で自然にこのプロジェクトに参加出来る契機となった。(写真11)

3-4. 「ブックつり〜」プロジェクトの設計プロセス

今回は、ミーティングを始める段階で渋谷という場所は決定していたが明確な場所は指定されていなかった。そのため、まず渋谷駅周辺のリサーチ、「サイト・リーディング」を行った。当初、渋谷川周辺の渋谷のあまり知られていない場所を活用する案もでていたが、(5, 6月)渋谷の特性を表現する空間について話し合いを進める中で、渋谷のポテンシャルは良くも悪くも、駅を行き交う「人」がエネルギーを生んでいることに着目し、「人の集まる場所」に話は収束していった。(写真1)

そこで挙がった設置場所として、「ハチ公前広場」や「マークシティ1階入り口付近」、「JRと井の頭線の改札

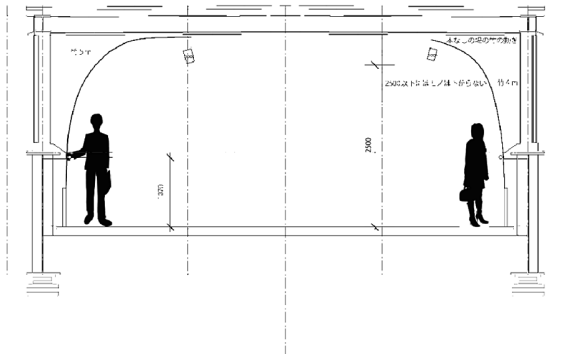


図1 立面図

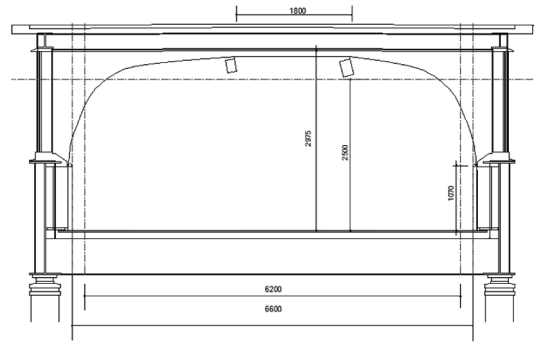


図2 断面図

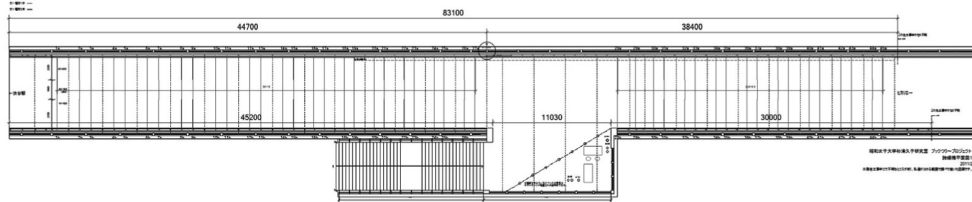


図3 平面図



写真9 完成



写真10 来場者との本の交換

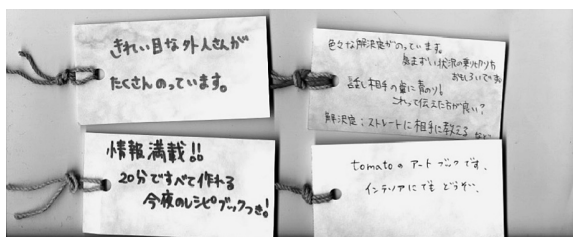


写真12 しおりにメッセージの記入



写真11 読売新聞での掲載 (2011.2.6)

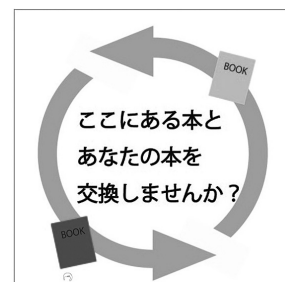


写真13 プロジェクトロゴ

を結ぶ通路」などの案があった。中でも「JRと井の頭線の改札を結ぶ通路」で過去に展示を行った経緯があることを知り、この場所でのような企画が可能であるかのスケッチやスタディを皆で持ち寄った。(6, 7月)この時点では歩行者の歩みを緩めるような企画が多く見られた。

渋谷らしい空間を表現するという企画内容について、ブレイン・ストーミングを重ね、渋谷に関連する「何かを集積する」、「時間や音で表現する」、「渋谷のミニチュアを製作する」などの3つのアイデアにまとまっていった。(写真3, 5) (8月)

また、前述したようにこの根底に「人」が生むエネルギーや動き、生物的なイメージがあり、何か「動きを伴う空間」というコンセプトが生まれてきた。

そしてこのことと、渋谷に関連する「何かを集積する」案が発展し、渋谷の本を集積する案がでてきた。(8月)

様々なスタディ案が検討されたが、動きを伴うイメージから、本を吊すことにより揺らぐ空間というアイデアに収束していった。

この案を実際に検証すべく、7, 8月頃から実際に釣り竿状の様々な素材に重りを吊し実験を行った。その結果、素材として竹材(割竹)の可能性が高く、そのサイズやしなり具合と重さの関係などの検討を行った。(写真4, 6) (ここから秋桜祭の「シャラ・ぼん」にも派生した)

8月末、「shibuya 1000」が主催する現場見学会に参加し、開催予定地を見学する中から、私達は多くの歩行者が行き交う空間である「跨線橋」(自由通路)でプロジェクトを行うことを決定した。

日々変化のない通路が、ある期間だけ日常と違う様相の空間に変化し、通行の流れを妨げることなく、歩行者が空間を楽しむことの出来る企画を話し合った。そして、この敷地では本を媒体にコミュニケーションを起こす「ブックマーケット」案が成立するのではないかと考えた。

さらにミーティングを重ね、9月初めに「ブックつり〜」という案が決まり企画書を提出した。釣り竿のような形状の細い竹に本を吊し、風が吹くと揺れる空間をつくる。吊された本の中で、交換したい本と歩行者が持ってきた本を運営者が交換するというプロジェクトを構想した。(写真7, 図1)

10月からは案の詳細を詰めていった。古い跨線橋の図面を入手しつつ、不足している寸法の実施計測を行い、空間を模型にし、本数や形状、サイズなどを検討し、実物大のモックアップにて検討する。(写真6)この繰り返しを何度も行った。同時に渋谷の地域関係者にも呼びかけ本の収集も行った。(10月から2月)

また、明治通り上という公共の空間であったため、主催

者や事務局の方々と一緒に様々な関係省庁(東京都や渋谷区の土木課、建築課、消防署、警察署)や事業者(東急電鉄、東京メトロ、コンサル会社など)に企画案の説明に伺い、許可をいただきに回った。(12月から2月)

この場所は、渋谷駅の開発工事により今年で消え行く場所であるということもあり、関係者の理解を得ることは出来たが、日本でも有数のターミナル関連施設であり、公共交通路上の工作物でもあることから滞留禁止、通行妨害にならないように最大有効幅員の確保、高さ制限、防災対策など安全確保のために(法的な規制ではないが)、プロジェクトが進む中、次々に新たな条件が加わっていった。予測はしていたが、設置可能場所は、通路両脇壁面と天井とのギリギリの僅かな空間のみであり、かなり厳しい条件であった。

しかし、その都度検討し、対応策を講じ、変更を加えた。(1, 2月)(本物々交換は、跨線橋中央の階段前にある通行の妨げにならない空間で行った。(写真10))

特に、当初考えていた片持ちのアーチ(竹材)の先端部に本を吊る案は、故意に揺らされた場合、安全性が確保しづらいことなどから、急遽、両端から片持ちのアーチ(竹材)同士を繋いで、ひと繋がりアーチとし、歩行者の邪魔にならない高さで吊す形となった。(図2) (2月)

さらに、会期直前に、故意に揺らされた場合の安全確保ということから蛍光灯と重なる部分のアーチは撤去することとなった。(予定本数の1/3程度減となりアーチ及び本の冊数もかなり減じた。)

3-5. 「ブックつり〜」プロジェクトの素材と加工・制作方法の検討

「ブックつり〜」プロジェクトはタイトルにもあるように、本を吊り下げるデザインイメージがあった。実際に幅員6.5mの通路に、片持ちの1本のアーチから1冊の本を吊す計画であったので棒の長さは4~6m程度が必要であった。

安価で、入手しやすく、一体化した部材で、この長さを確保でき、さらに適度なしなりと荷重に対する強度があること。その条件に見合う素材として、「竹」が候補に挙がった。また、1本の竹を縦に割る加工のしやすさから、太さも自由に設定出来る。しかし、竹は自然物であり、しなり具合や強度といった個体値がそれぞれ異なる。これはデメリットでもあるが、部材の個性として受け入れることで、同じ一群の部材(ここではこれをユニットと呼ぶ)を繰り返し使用する空間デザインにおいて微細な心地よい変化を与えられると考えた。(写真6)



写真 14 本を見上げる人々



写真 15 渋谷駅改札方向へ向かう人々 1



写真 16 渋谷駅改札方向へ向かう人々 2

使用素材

直径8cmの青竹を縦に6分割した割竹を使用
幅4cm×長さ4m … 40本(片持ちアーチ)
幅4cm×長さ4.5m … 40本(片持ちアーチ)
幅2cm×長さ2.5m … 40本(アーチ接続用)
幅4cm×長さ1m … 80本(補強用)

長さ4mと4.5mの片持ちアーチを長さ2.5mの部材で接続したものを1アーチとし、これを1ユニットと考える。

さらに現場で施工した際、端部に補強材として長さ1mのパーツを加えた。

部材の加工・制作方法

- ① サンダーで竹の皮や節を削る。外側の皮を剥離することで、塗料が素材に付きやすくなる。
- ② 紙ヤスリで削り残した皮を削る。
- ③ 不燃塗料を吹き付け、竹に染み込ませる。
- ④ アクリルエマルジョンペイントという白い塗料で塗装する。
- ⑤ 4m(4.5m)の部材と補強用の1mの部材を繋ぎ合わせるため、ビスで10cmごとに穴を開ける。(写真4)
- ⑥ 穴にテグスを通し、2本の竹を縫い付けるように固定する。
- ⑦ 接合部を強化するため、結束バンドで固定する。

現場での施工方法

- ① 加工した長さ4mと4.5mの竹のアーチ(片持ちアーチ)を長さ2.5mの接続用部材でボルトを使い繋ぎ合わせ、1アーチ、1ユニットをつくる。
- ② さらに現場で施工した際に、両端部に補強材として長さ1mのパーツを加えた。
- ③ 跨線橋の下端に設置した角スタッドへ、このユニットをビスで固定し設置した。

3-6. 「ブックつり〜」プロジェクトの評価

実現したプロジェクトには、それぞれ成功点と反省点がある。

「ブックつり〜」プロジェクトにおいて、通行人数は多すぎて記録出来なかったが、実際に本を交換した参加者は1日平均約20名で、9日間で200名弱、303冊の本の物々交換が行われた。開催前に渋谷の地域より回収し用意していた冊数は120冊であり、短期間に2倍以上の本が交換され、非常に多くの参加があったことがわかる。参加者からは「是非このような企画を継続してほしい」という感想を多数いただき、励まされた。また、Twitterや新聞など、様々なメディアに取り上げられ、その反響は大きく、渋谷のこの場所でのサイト・リノベーションの可能性を非常に強く感じた。

デザイン的には、公共空間において万が一を考え、安全確保の理由から、天井照明と重なる部分のアーチは直前に排除することとなった。また、夜間の湿度上昇により竹の変形が大きくなったために一定の高さを確保出来なくなったアーチは会期中に排除した。使用許可をいただけただけでも幸運であったと考えるべきであり、この現場での事前の実験も不可能であったため、開催直前直後で変更が生じることとなった。その結果、アーチや吊される本の本数が減り、空間のインパクトが弱まったことは残念であった。しかし、消え行く公共空間最後のイベントが、様々なコードと戦いながらも実現出来たことは奇跡的なことであった。(すべての許可がいただけたのは開催日5日前であった。)

4. 「シャラ・ぼわん」から「はなみち」プロジェクトへ

4-1. 「シャラ・ぼわん」プロジェクトの目的

「シャラ・ぼわん」プロジェクトは、本学の学園祭において、学園本部館前の広場で行ったプロジェクトである。本学の創立90周年記念、ホームカミングデーのために「祝祭空間」の計画をした。(写真24, 25)

前述の「ブックつり〜」プロジェクトにおいて7, 8月頃から割った竹材の可能性について、そのサイズやしなり具合と重さの関係などの実験を行う過程の中から、この「シャラ・ぼわん」プロジェクトへと発展したものである。

1本の青竹を12分割の割竹にした際、竹の途中で割ることを止め、そのままの形状にすると花のような木々のような形状が生まれる。(図4) その形状と風に揺らぐ感じが、学園本部館前の植栽空間と広場の間に、何か、自然と人工を繋ぐバッファゾーンを設けたいと考えていた際、華やかな祝祭空間という目的や、「空間に有機的な動きを表現する」という目的に対しても有効であると考えられた。

4-2. 「シャラ・ぼわん」プロジェクトの概要

女子大での祝いの空間ということから、来訪者を歓迎する華のある空間をイメージした。(写真18) ここにある、既存の木々の植栽空間が拡張し、空間のボリュームが動き変化するような計画を考えた。(写真19) この空間を実現する素材として、前述の、1本の青竹を12分割し途中で止め、花のような形状にしたユニット(大)(図4)で森のような花畑のような空間をつくり、この中を回遊したり腰掛けたり出来る空間とした。

「シャラ・ぼわん」プロジェクトは周りの木々に同調し、訪れた人々には風に反応して揺らぐ空間のボリュームに包まれながら憩える場所を提供した。(写真25) (11月)

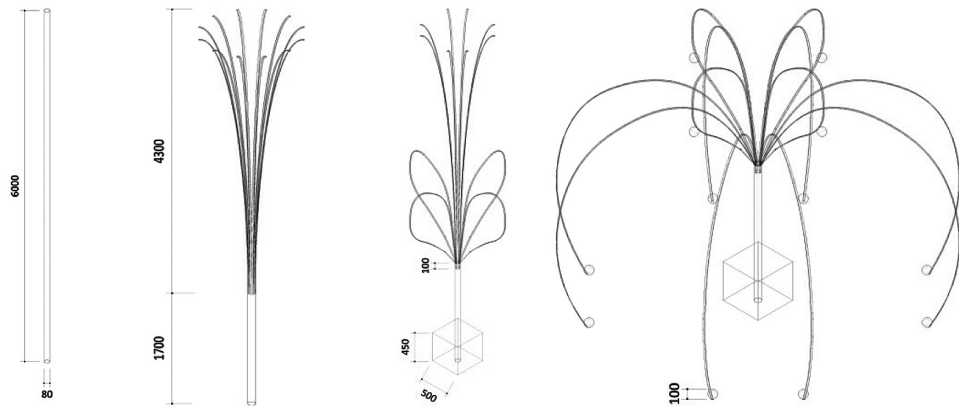


図4 シャラ・ぼわん 竹の加工方法



写真17 やすりによる加工



写真18 空間イメージ模型

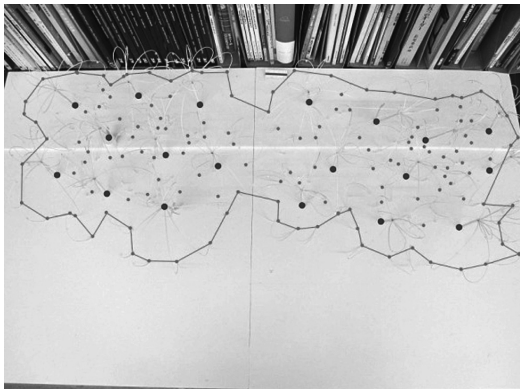


写真19 三角形をベースに配置の検討



写真20 立体的なボリュームの検討



写真21 白ペンキで塗装



写真22 曲線の癖付け

4-3. 「シャラ・ぼわん」プロジェクトのコンセプト

■自然に寄り添うデザイン

「シャラ・ぼわん」プロジェクトと「はなみち」プロジェクトは、サイトにある既存の植栽空間が場所の特性として読み取れた。それをデザインに組み込み、自然物である木々の空間に連続するバッファゾーンを人工物で再現し、空間のボリュームを拡張した。

■人工物と自然物が呼応し、動きを伴う空間

意図するものに素材を従わせるのではなく、素材に寄り添うことで出来るフォルムと空間をつくった。

自然素材の竹は、本来のしなりを利用することで、ユニット一つひとつが微細に異なるフォルムとなり、素材に寄り添った自然物に近い形を生み出すことが出来た。裂かれた竹は、重力とその弾性によってしなる曲線の集合を織りなし、その疎密の空間の中に人は導かれ、回遊する。人の動きや風や光、吊されたオーナメントの荷重により揺らぐ空間をつくることで空間ボリュームに動きを出した。(図5)

4-4. 「シャラ・ぼわん」から「はなみち」

プロジェクトへの設計プロセス

2つのプロジェクトには、「空間に有機的な動きを表現する」、「祝祭空間をつくる」という2点の同様な目的が存在する。

第1の目的である、空間に有機的な動きを表現するために、「ブックつり〜」プロジェクトから使用していた、柔軟性のある「竹」に注目した。そして、実際に竹に触れながらしなり方や強度を肌で感じ、素材の特徴を活かしたユニットのデザインを試行錯誤した。(写真20) (9, 10月)

まず、一本の竹を8分割にした部材をしならせ、アーチ状のデザインを考えた。しかし、8分割ではしなりが反発力に劣ることで、美しいアーチをつくるが出来なかった。そして、竹の根元まで分割するとアスファルトの地面に自立させることが困難になった。これらの問題点を解消した結果、最終的にしなりが強い12分割で竹を途中まで裂き、細い幅の竹に動きを持たせることで、ユニット(大)を制作した。さらに、竹を下までしならせる工夫として竹先端に重りを付け、より曲線を美しく表現した。(写真22) (10月)

第2の目的である、祝祭空間の表現として、偶然2つの場所に共通してあった「植栽空間」と同調するような空間のボリュームを表すユニットの配置を考慮した。「シャラ・ぼわん」プロジェクトでは、20個のユニット(大)をランダムに配置することで、森や花畑の間を通り抜けるように、包まれる空間を実現した。さらに、ランダムに水滴のような重りを吊すことにより、空間に華やかさと動きを与えた。

「はなみち」プロジェクトではさらに広域であったため「シャラ・ぼわん」プロジェクトを発展させ、通路の両脇の植栽空間全面に大、中、小の大きさとデザインの異なる3種類のユニットを配置し、花畑のような道を通り抜けて行ける空間を計画した。(写真28, 図7)

また、夜のイベントでもあったので、これらに大量のクリスタル状のオーナメントを吊し、風や光に煌めく空間を考えた。

4-5. 「はなみち」プロジェクトの概要

「はなみち」プロジェクトは、2011年の「六本木アートナイト」展において六本木ヒルズのエントランス空間である「66 プラザ」で行う予定であった企画案である。(写真26, 29)

「六本木アートナイト」展とは、六本木の商店街や、3つの美術館を含むまち全体を舞台に行う一夜限りのアートの祭典であり、今回が3回目であった。当初2011年3月26日から27日にかけて開催される予定であったが、3月11日に起きた東日本大震災の影響により敢え無く中止となった。

2010年12月に急遽、参加依頼があり、いくつかの案を企画していたが、様々な可能性の中から最終的には「シャラ・ぼわん」プロジェクトのアイデアを発展させた企画となった。(1月)

4-6. 「はなみち」プロジェクトのコンセプト

■素材や場に寄り添うことで出来るフォルムと空間

3月の一夜限りのイベントに、この場所にある、寂しげな植栽空間(まだ芽吹いていないため)を煌めかせることを目的とした。六本木ヒルズの玄関口という様々な人が通過する空間性を活かし、そこにある植栽にかこまれた空間を道と見立てた。

また、3月は出会いと別れと旅立ちの季節であり、その新たなスタートに向けた想いを込め「はなみち」プロジェクトと名付けた。「はなみち」では、「シャラ・ぼわん」で使用したユニット(大)の他に、空間の立体的な広がりを出すため、新たに2種類のユニット(中)とユニット(小)を加えた。(図6) (3月)

4-7. 「シャラ・ぼわん」、「はなみち」プロジェクトの

素材と加工・制作方法の検討

・ユニット(大)

使用素材

6mの竹を途中4.3mまで12分割した青竹(直径8cm, 高さ6m)



写真 23 パーツ取付とユニット配置作業

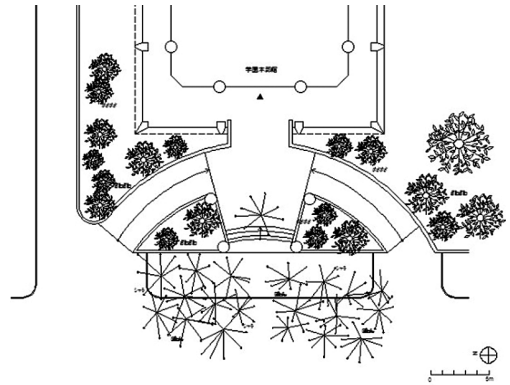


図 5 配置図



写真 24 完成



写真 25 俯瞰景

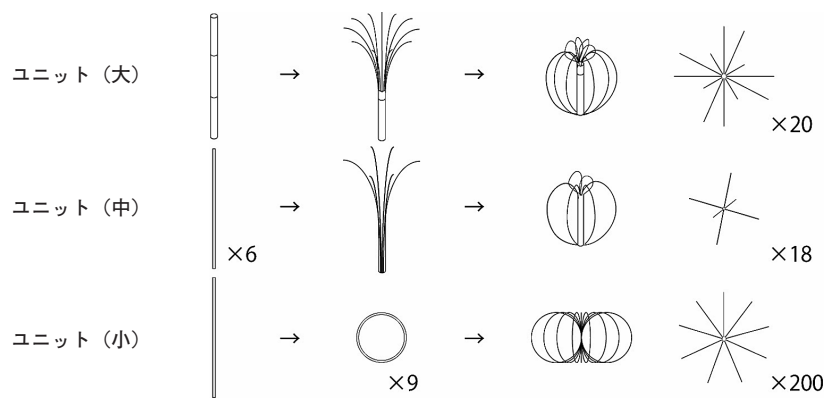


図 6 はなみち 竹の加工方法



写真 26 はなみち 敷地

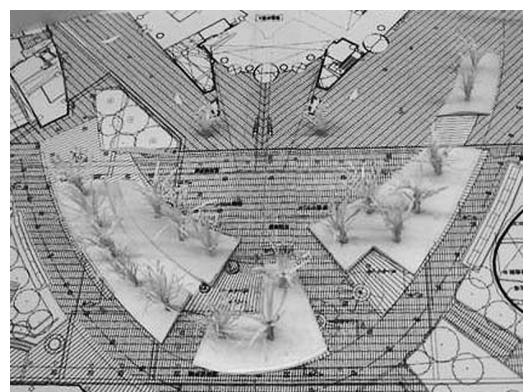


写真 27 第 1 案 模型

加工・制作順序

- ① サンダーで竹の皮と節を削る。(写真32)
- ② 紙ヤスリで細部を削る。(写真17)
- ③ ペンキで塗装する。(写真21)
- ④ 裂いた竹の上部に、それぞれ穴をあける。
- ⑤ 穴を開けた部分にテグスを通して、カーブを癖付けるために竹の下部に固定する。(写真23)
- ⑥ 半分は上向きに丸め、先を中央にさす。
- ⑦ 下部に固定した竹の上部を外す。
- ⑧ 曲線をつくるため、重りを吊す。
- ⑨ 重さはビー玉の数で調節し、透明のカプセル内に入れる。「はなみち」ではクリスタルオーナメントを計画)

・ユニット (中)

使用素材

幅2cm×長さ4mの竹材(「ブックつり〜」で使用したものの再利用)、塩ビ管φ26mm×h700mm

工法順序

- ① 竹を4mから3mに切る。
- ② 塩ビ管の周りに竹を結束バンドで固定する。
- ③ 竹の先端部分に動きを付け、形をつくる。(写真33)

・ユニット (小)

使用素材

竹ひご(幅8mm×長さ180mm)×9組、塩ビ管φ26mm×h700mm

竹ひご(幅5mm×長さ180mm)×9組、塩ビ管φ18mm×h700mm

加工・制作順序

- ① 竹ひごを丸めて円環にし、結束バンドで固定する。
- ② ①を9つ作製し塩ビ管に束ねる。
ユニット(小)完成。(写真30)
- ③ ユニット(小)を、3つずつ連結させ、施工時の作業効率を上げる。

4-8. 「シャラ・ぼわん」, 「はなみち」プロジェクトの評価

「シャラ・ぼわん」プロジェクトに対しては、「学内がいっつもと異なり華やいで嬉しい」という感想を学生や来場したOGから多くいただいた。

隣接するステージを見学する椅子としての機能も果たした。さらに子供達も多く参加し、遊びの空間となった。

予算の関係上腰掛け部分はプランターボックスを転用したため、形が既存のフォルムに従わざるを得なかった。

ここからさらに派生した「はなみち」プロジェクトは3月11日に学内で森美術館の関係者と最終打ち合わせ(ほとんどの部材が完成し、設営方法の打ち合わせを行っていた)をしていたところ地震が起き、中止となってしまったことが

本当に残念であった。

3つのプロジェクトとも様々な反省点はあるが、各々の場所に構想時点で考えていたコンセプトに沿った日常と少し異なる空間が生まれ、人々のコミュニケーションが起ったことは良かったと考えている。

5. 今後の展望

「サイト・リノベーション」という活動は既存空間の意味を見出し、人を含む空間全体を関係付けていくような環境をつくることだ。また、場の意味を顕在化させ、変化させることでまちを活性化してきた。今年起こった東日本大震災(自然)は、現代都市(人工)を津波が呑み込み、まるでその場所が一瞬にしてリセットされたかのように変わり果てた姿となり、現代に原始の姿が現れた様であったと筆者には思えた。しかし、この場所の意味までもが一掃されたわけではなく、この場の記憶や経験は人々の心の中に生きている。このような人々の想いを顕在化させることで、新たなコミュニティの場を今後もつくっていきたい。

■ブックつり〜 詳細

開催期間: 2011年2月5日~2月13日

参照: shibuya 1000

<http://www.shibuya1000.jp/>

<http://www.shibuya1000.jp/news/>

掲載、放映など *商店建築 2011年4月号 商店建築社

*東京新聞 都心版 2011年2月6日

*日刊建設工業新聞 2011年2月9日

*shibuya 1000 URBAN EXPO 2011 報告書
(p 21, p 76, p 78, p 98, p 118, p 119)

2011年4月 shibuya 1000 実行委員会

*TOKYO MX TV [TOKYO MX NEWS]
街の魅力伝える shibuya 1000

2011年2月5日

参加メンバー: 杉浦久子, 鈴木さやか, 水尾綾香, 大谷美紀子, 岡本はんな, 河野詩穂, 是安真愛, 鈴木千晴, 高田美矩, 田中未知香, 増田愛香, 山崎亜美, 菅井さゆり, 仲愛美, 待山麻美, 小岩井彩未, 渡邊知代, 大中愛子, 中村萌, 後藤友香, 斉藤美鈴, 早坂美紀, 長久保麗子, 山田安紀, 田村奈菜子, 橋原杏奈, 堀義之, 株式会社山十

■シャラ・ぼわん 詳細

開催期間: 2010年11月13日~14日

掲載: 新建築 2011年3月号 新建築社

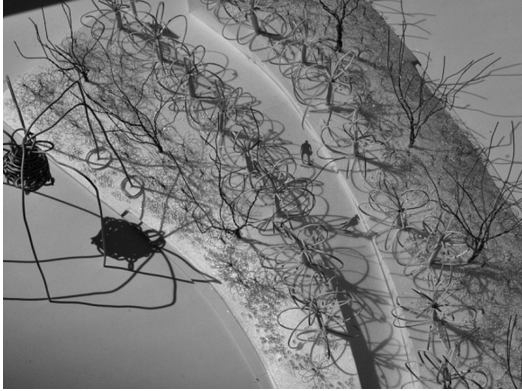


写真 28 密度感を検討

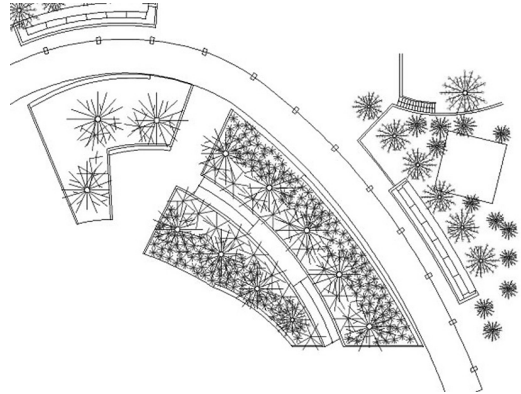


図 7 配置図

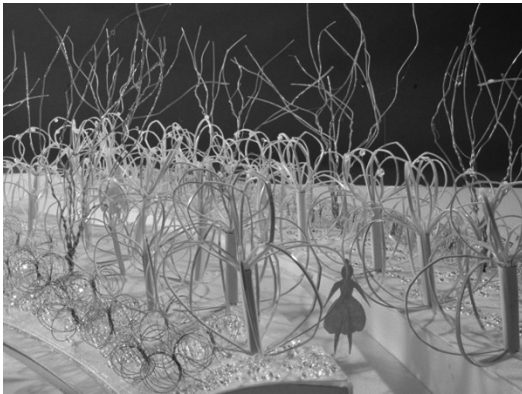


写真 29 空間イメージの確立

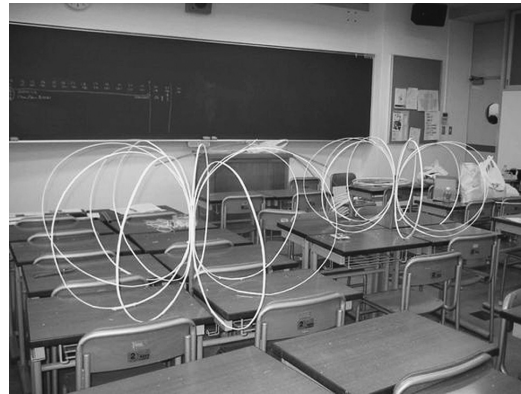


写真 30 ユニット（小）のデザイン検討



写真 31 施工打ち合わせ（六本木ヒルズ内）

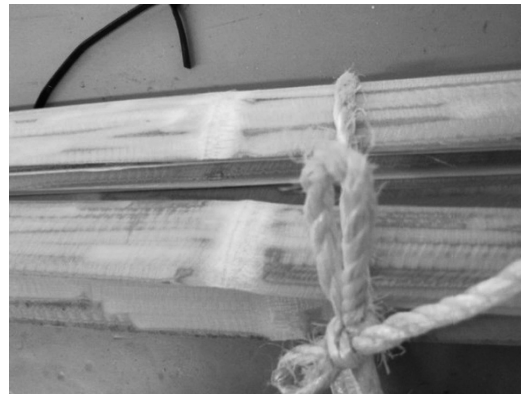


写真 32 ヤスリ加工済みの竹



写真 33 ユニット（中）の施工方法検討

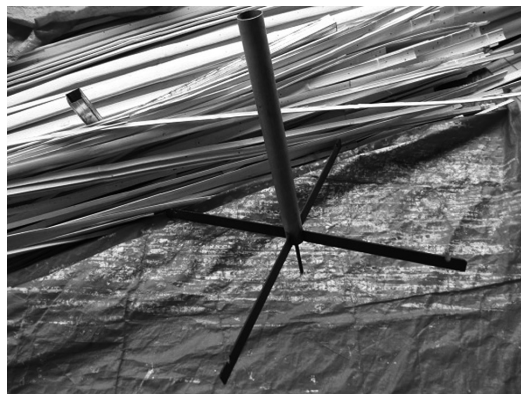


写真 34 足元の部材検討

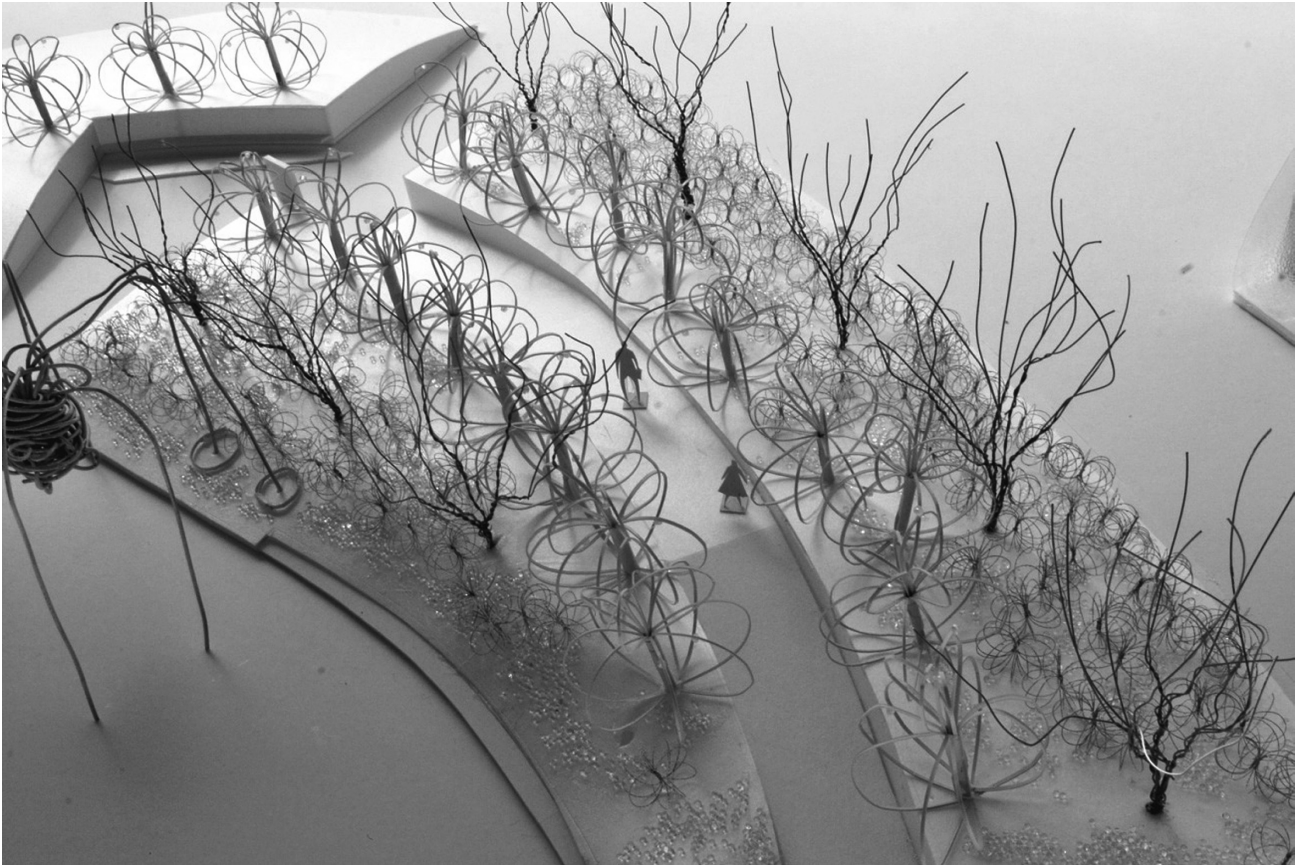


写真 35 はなみち コンセプト模型 (六本木ヒルズ 66 プラザ)



写真 36 はなみち コンセプト模型



写真 37 シャラ・ぼわん 当日 イベントを観る人々

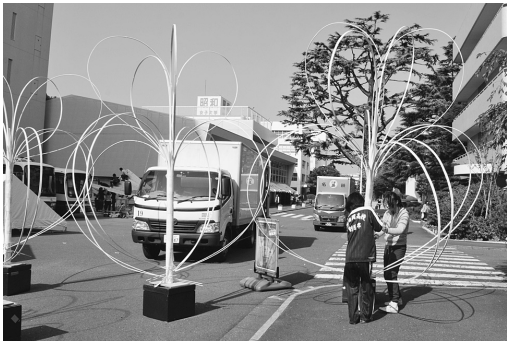


写真 38 シャラ・ぼわん 当日準備



写真 39 シャラ・ぼわん 俯瞰景



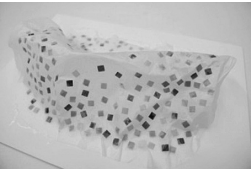

写真 40 シャラ・ぼわん 正門方向をみる






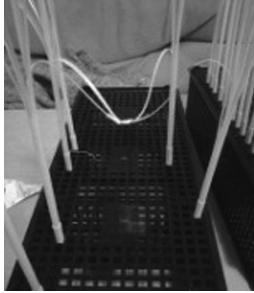

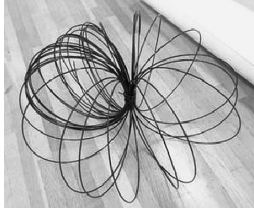

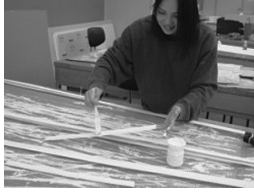


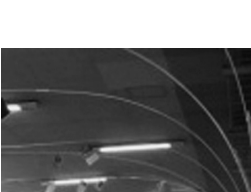


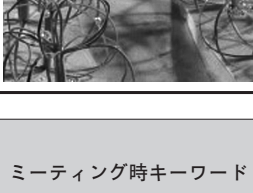
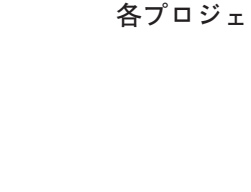
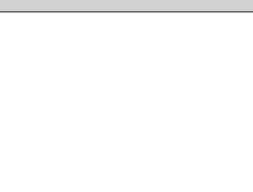
写真 41 作品の前で



写真 42 ライトアップでの演出

ブックつり～				シャラ・ぼわん		
写真	研究室	その他関係者		研究室	その他関係者	写真
	顔合わせ		2010年 5月			
	渋谷リサーチ	定例会議	6月			
	集積, ミニチュア					
	時間, 音					
	敷地検討	定例会議	7月			
	動き, ブックマーケット	現場見学会	8月			
敷地決定 (跨線橋)						
	サイト・リーディング		9月		敷地決定	
	デザイン検討			祝祭, 竹む, しなり		
	ブックつり～決定			竹加工方法検討		
	企画案作成	企画書提出		デザイン検討		
	ラフ模型作製	東急電鉄打ち合わせ		ペンキ加工		
	図面作成	図面提出	10月	シャラ・ぼわん決定		
	竹の強度実験			丸みをつける		
	本収集			重りで撓ませる	戸田建設打ち合わせ	
	竹の接着方法検討	全体プレゼン	11月	現場施工		
				文化祭当日		

各プロジェクトのプロセス (ブックつり～, シャラ・ぼわん)

ブックつり～			はなみち				
写真	研究室	その他関係者	研究室	その他関係者	写真		
	サンダーがけ		12月	ミーティング開始	敷地決定		
	防火実験	東京都打ち合わせ		神酒口, 祝い			
	本, 吊し方実験	東京都打ち合わせ		敷地リサーチ			
	留め方検討	消防打ち合わせ	2011年 1月	第1企画案作成			
	細部検討			第1企画案提出	第1企画案提出		
	施工準備		2月	はなみち, 植栽, 3月	敷地変更		
	現場施工			はなみち決定	企画案提出		
	shibuya 1000 当日		3月	ペンキ塗り			
				実物試作	打ち合わせ		
				施工方法検討			
				中止	施工打ち合わせ		

各プロジェクトのプロセス (ブックつり～, はなみち)

※表記方法→

ミーティング時キーワード

参加メンバー: 杉浦久子, 鈴木さやか, 水尾綾香, 大谷美紀子,
岡本はんな, 河野詩穂, 鈴木千晴, 高田美矩,
田中未知香, 増田愛香, 山崎亜美, 菅井さゆり,
待山麻美, 小岩井彩未, 渡邊知代, 杉山杏実,
新井富美子
堀義之, 株式会社山十

・建築デザイン発表会梗概集サイト・リノベーション (その1-3)
132-137 2008年度日本建築学会大会

(すぎうら ひさこ 環境デザイン学科)
(すずき さやか 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年)
(よしだ おりね 生活機構研究科環境デザイン研究専攻2年)
(ごとう ゆか 生活機構研究科環境デザイン研究専攻1年)
(ながくぼ れいこ 生活機構研究科環境デザイン研究専攻1年)

■はなみち 詳細

開催期間: 2011年3月26日~27日 ※東日本大震災により中止

参照: 六本木アートナイト

<http://www.roppongiartnight.com/outline/index.html>

<http://www.roppongiartnight.com/program/index.html>

<http://www.roppongiartnight.com/roppongihills/index.html>

#pagelink08

参加メンバー: 杉浦久子, 津森喜子, 鈴木さやか, 水尾綾香,
大谷美紀子, 岡本はんな, 河野詩穂, 鈴木千晴,
増田愛香, 山崎亜美, 菅井さゆり, 仲愛美,
待山麻美, 小岩井彩未, 渡邊知代, 山口莉歩
足立理紗, 田中千晴, 吉村咲紀, 中村萌,
吉田織音, 井野由美子, 後藤友香, 是安真愛,
高田美矩, 田中未知香, 菅井さゆり, 池麻理奈,
岩崎知世, 河野華子, 清水栄理

※注1

- ・『学苑』平成16年11月号 No.769 6-21「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—居場所をつくる サイト・リノベーション—」(杉浦久子・木村映理子)
- ・『学苑』平成17年7月号 No.777 107-118「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—二子玉川におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・角屋ゆず)
- ・『学苑』平成19年7月号 No.801 96-105「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・清水麻里)
- ・『学苑』平成20年7月号 No.813 86-100「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—世田谷区北烏山屋敷林市民緑地におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・清水麻里)
- ・『学苑』平成21年7月号 No.825 55-64「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—商店街空き店舗におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・大中愛子・中村萌)
- ・『学苑』平成22年7月号 No.837 59-68「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—新潟県十日町市におけるサイト・リノベーション (その2)—」(杉浦久子・鈴木さやか・吉田織音)
- ・『学苑』平成22年7月号 No.837 69-75「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—渋谷周辺の地形及び地下空間におけるサイト・リノベーション—」(杉浦久子・大中愛子・中村萌)